

迷信行動のトポグラフィとパーソナリティ特性（内向性、外向性）との関連性 The Relation Between Topography of Superstitious Behavior and Personality of University Students

○沼倉豪輔・森山哲美

Gosuke NUMAKURA and Tetsumi MORIYAMA

(常磐大学人間科学部・常磐大学人間科学部)

Tokiwa University; Tokiwa University

I. 目的

行動と刺激の提示の間に因果関係が無く、偶発的な強化随伴性によって強化されるオペラント行動を迷信行動と呼ぶ。Skinner (1948) は、ハト8羽に対してFT15秒の強化スケジュールを実施して、偶発的な強化随伴性によって強化される行動を見出し、この行動を迷信行動と定義した。またOno (1987) は、大学生を対象にFT30秒と60秒、VT30秒と60秒を実施し、ヒトでも動物と同様に多様な迷信行動が生じることを明らかにした。

迷信行動の多様なトポグラフィは、このように偶発的な強化によって生じることがこれまでの研究で明らかにされた。そうであれば、偶発的な強化に触れる機会の多かった行動が迷信行動になる可能性が高いと言えるだろう。これは、見方を変えれば、偶発的な強化を受ける前のオペラントレベルの高い行動が迷信的な行動になりうるということの意味する。

このようにオペラントレベルの高い行動が迷信行動のトポグラフィに反映されるのであれば、迷信行動を実験的に調べる場合、偶発的な強化随伴性が設定される以前の個人の行動傾向が調べられる必要があるだろう。そのような行動傾向は、個人のこれまでの強化随伴性によって制御された一般的な行動特性、すなわち、ある意味でのpersonalityといえるかもしれない。したがって、このような行動と迷信行動の関連が調べられる必要がある。

本研究は、偶発的な強化随伴性のもとで形成される迷信行動とpersonalityの関連を、大学生を対象にして調べることを目的とする。

II. 方法

参加者：YG 性格検査の外向・内向性を調べる10項目の質問を改変して作成した5段階評価式アンケートをT大学学生40名に行い、その結果から外向性と判断された学生2名（男性1名、女性1名）と内向性と判断された学生2名（男2名）を選出し、彼らを実験参加者とした。

手続き：Ono (1987) を参考に、迷信行動が最も生じやすかったFT30秒を強化フェーズのスケジュールにした。このフェーズを30分行った後、消去フェーズ（10分）を行った。各参加者は、あらかじめ実験室内で自由に行動してもよいと教示され、個別に実験を受けた。実験室にはもろもろの押しボタンが用意された。これらに対する参加者の反応は、強化刺激（得点）の提示と無関係であった。

III. 結果と考察

外向性の参加者2名と内向性の参加者1名に迷信行動が見られた。概して、外向性の参加者は、実験室内のもろもろの器具に触れたり、実験室内をかなり移動したりする行動を示し、それらのトポグラフィは多様であった。一方、内向性の参加者は、実験室内の限られた対象、特に押しボタンに頻繁に触れる行動が目立った。なお、内向性の残りの1人は、随伴性に対する意識性を獲得したため、迷信行動は認められなかった。

以上の結果から、外向性と内向性というpersonalityの違いは、偶発的な強化随伴性で形成される迷信行動の多様性に反映している可能性が示唆された。今後、参加者の数を増やしてこの問題をさらに検討する。